Osaka University Knowledge Archive

Title	エイジズムの生起要因についての研究展望
Author(s)	菊地, 亜華里
Citation	生老病死の行動科学. 2020, 24, p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76696
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

生老病死の行動科学 2020 年　第 24 巻　pp.23 - 32

展望論文
Review Article

エイジズムの生起要因についての研究展望

Review of occurrence factors of ageism

（大阪大学人間科学部人間科学科）菊地　亜華里[1]
（Osaka University, Undergraduate School of Human Sciences）Akari Kikuchi

Abstract

Prejudice and discrimination against the elderly are called “ageism” and this has been shown to have a negative impact on people's aging. Therefore, in order to realize better aging for people, it is necessary to theoretically elucidate the mechanism by which ageism occurs and to study intervention measures. Regarding the occurrence of ageism, explanations using the frameworks of “Terror management theory: TMT” and “Social identity theory: SIT” have been mainly considered. Based on the findings of previous studies, it was hypothesized that TMT and SIT are appropriate for the explanation of ageism among young people, and that SIT is appropriate for the explanation of elderly ageism. This age difference could be explained from the viewpoint of “Intolerance of uncertainty”.

Key words: ageism, Terror management theory, Social identity theory, death anxiety, aging anxiety

はじめに

内閣府の令和元年版高齢社会白書（2019）によると，65 歳以上の高齢者の新体力テストの成績は向上傾向にあるとされている。さらに，「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」を指す「健康寿命」は延伸しており，その延びは平均寿命の延びを上回っている。また，社会活動の状況について見ると，60 歳～69 歳では 71.9%，70 歳以上では 47.5%の者が働いているか，またはボランティア活動, 地域社会活動（町内会, 地域行事など），趣味やおけいこ事を行っている。つまり，近年の医療の進歩や健康志向の向上，あるいは社会参加の場の拡大などを背景として，健康で体力のある高齢者が増加しており，また，多くの高齢者が社会で活躍し，さまざまな活動に従事していると言える。

そのような事実にもかかわらず，日常生活のあらゆる場面において，年をとることや高齢であることは，依然としてネガティブなこととして捉えられている。それどころか，加齢に対するステレオタイプが年々ネガティブなものになってきているということを示す研究（Ng, Allore, Trentalange, Monin, & Levy, 2015）もある。例えば, 年代を問わず多くの人々が, 自分に対しても他者に対しても，「もう年だから」と言いながら能力や外見を低く評価したり，「こんな年にもなって」と年齢を理由にして行動を制限したりする。このように, 人々は, 年を重ねることを, 能力や立ち振る舞い，あるいは外見のネガティブな変化と結び付けて語る。これらの言い回しを扱った明確な統計や研究結果があるわけではないが，人々の間でかなり一般的になっている表現と言えよう。また，化粧品や健康食品等の広告には，実年齢よりも若く見られる効果があることを宣伝するものがあり，単純に年齢が若いことがポジティブなイメージと結び付けられている。つまり，人々の間には，若いことを良いこと，高齢であることを悪いこと，と

[1] Correspondence concerning this article should be sent to; Akari Kikuchi，Undergraduate School of Human Sciences, Osaka University，Osaka，565-0871，(u232879d@ecs.osaka-u.ac.jp)

いう評価に直接結びつけるような思考傾向が存在している。高齢であることが悪いこと，といっても，例えば，高齢になると体が弱くなってくるから，体が弱った高齢者を見かけたら気にかけるようにしようというような思考に至るなら，特に問題にはならない。しかし，例えば，50 歳にもなってそんなことをすべきではないとか，65 歳以上の人はみんな体力や認知機能が衰えている，というように，年齢という指標だけで行動を制限したり能力を判断したりするような思考に至り，実際に就労などで年齢制限を設けたり，一定年齢以上の人が若年層と同じような行動をとることを悪く言ったりするようになってくると，これは深刻な問題になる。このような，単純に年齢を理由とした偏見や差別はエイジズムと呼ばれ，問題視されている。

エイジズムとは

R. N. Butler が，「高齢者が高齢であるために，彼らに対して抱く体系的なステレオタイプと差別の過程」を意味するものとして，エイジズムという言葉を初めて使用した（Palmore, 1995）。その後，E. B. Palmore がエイジズム研究をさらに発展させた。彼の定義するエイジズムは，あらゆる年代に対する偏見や差別を指し，ポジティブな側面とネガティブな側面の両方を含むものであるが（Palmore, 1995），特に老年学研究においては，高齢者に対する偏見や差別を扱う概念として用いられている。Palmore（1995）が主張するように，そもそもエイジズムは，セクシズム（性差別）やレイシズム（人種差別）と並ぶ深刻な差別と言われているにもかかわらず，ほとんどの人がエイジズムという言葉を知らず，高齢者に対する偏見や差別が深く浸透していることにさえ気がついてない。エイジズムは，前に挙げた他の 2 つの差別と違い，生きている限りは誰しもが差別をする側にもされる側にもなり得るという特徴をもつ。このように，すべての人に関係があり，広範にわたる根深い問題であるにもかかわらず，その重要性が過小評価されているという現実がある。

エイジズムに着目するにあたり，まずは，エイジズムを捉える概念的枠組みについて理解する必要がある。Palmore（1995）は，エイジズムを「ある年齢集団に対する否定的ないし肯定的な偏見もしくは差別」と定義した上で，高齢者に対する偏見を否定的ステレオタイプと否定的態度に分類した。ステレオタイプとはある集団（高齢者）に対する誤解もしくは誇張された否定的見方であり，否定的態度とは高齢者集団に対する否定的な感情をいうと説明している。そして，この両者にはお互いを補足しあう傾向が見られると述べている。また，Iversen, Larsen, & Solem（2009）は，エイジズムの形態を整理する際に，認知（cognitive），感情（affective），行動（behavioral）の 3 要素から態度が構成されるという，社会心理学の枠組みを適用した。すなわち，エイジズムの構成概念は，認知レベルのステレオタイプ，感情レベルの偏見，行動レベルの差別の要素に分けられるということである。そしてそこに，“肯定的（positive）/否定的（negative）”，“顕在的（explicit）/潜在的（implicit）”，“ミクロレベル（micro-level）/メゾレベル（meso-level）/マクロレベル（macro-level）”という 3 つを加えた 4 つの観点からエイジズムを捉えることができるとした。さらに，São José & Amado（2017）は，この枠組みに“自分自身に対するもの（self-directed）/他者に対するもの（other-directed）”という観点を加え，合わせて 5 つの観点からエイジズムを整理できると考えた（表 1）。このように，エイジズムの形態や概念的枠組みについて検討した先行研究はいくつか見られるが，そこで示された枠組みに基づいてエイジズムが生起するメカニズムを実証した研究はほとんど見られない。エイジズムの研究を行う際には，これらを踏まえてどの要素に着目するのか，あるいはどの要素間の関連を見るのかという点を明確にする必要がある。ちなみに，São José & Amado（2017）は，先行研究をこれらの枠組みに当てはめて整理を行い，これまでに検討されているのは全形態のうち一部分に過ぎず，ほとんどの形態がまだ十分に検討されていないことを指摘している。その中でも特に，自分に対する（self-directed），潜在的（implicit）なエイジズムについての研究が不足しており，今後，特に検討する必要があると述べている。

さて，前節で，高齢であることや年を重ねること

表1．5つの観点を組み合わせた32通りのエイジズムの形態

	ミクロレベル						メゾレベル	マクロレベル
	認知レベル ステレオタイプ		感情レベル 偏見		行動レベル 差別		ソーシャルネットワークにおける差別	制度的および文化的差別
	自分へ	他者へ	自分へ	他者へ	自分へ	他者へ		
顕在的/否定的	1	2	3	4	5	6	7	8
顕在的/肯定的	9	10	11	12	13	14	15	16
潜在的/否定的	17	18	19	20	21	22	23	24
潜在的/肯定的	25	26	27	28	29	30	31	32

出典：Iversen, Larsen, & Solem（2009），São José & Amado（2017）より筆者作成

をネガティブに捉える態度が，エイジズムとして現れてしまうと問題であると説明したが，実際にはどのような問題が生じるのだろうか。エイジズムの例としてよく取り上げられるのは，定年退職の制度や採用における年齢制限というような，就労場面におけるエイジズムである。Palmore（1995）によると，採用・昇進から解雇・退職に至る雇用面に最も明白で，深刻な差別が見られるとされている。つまり，一定の年齢以上の人は雇用側のニーズを満たすだけの能力がないとみなされ，就労の機会を失うということである。また，高齢者が耳の聞こえなどの身体の不調を訴えても，年齢のせいにされてきちんと診察してもらえないということもあると言われている（Monsees, 2002）。このような対応をされると，対象となる高齢者の自己評価や自尊心を下げる可能性も十分に考えられるし，その高齢者自身も，年齢を理由に様々なことを諦めてしまったり，物事に対して遠慮がちになってしまったりするという影響が考えられる。

一方で，そのようなネガティブな態度は，偏見や差別の対象となる人だけでなく，ネガティブな態度をもつ人自身にとっても悪い影響を与えることが分かっている。具体的には，加齢についてネガティブなイメージや態度を持つことが，自分自身の加齢に悪影響を及ぼすということが指摘されている。これは，Stereotype Embodiment Theory（Levy, 2009）によって説明されている。この理論では，加齢に関するステレオタイプが生涯を通して内在化され，潜在的に働くが，自分と関連するものとして徐々に顕在化し，多くの側面に影響を与えると考えられている。実際にあらゆる側面においてその影響が報告されている。例えば，異なる文化圏の人々を対象に，ドットの配列に関するいくつかの再生課題と，写真と文章を一致させるプローブ再生課題を実施した研究では，加齢に対する態度がネガティブな人の方が，よりポジティブな人に比べて，高齢期における記憶課題の成績が低いという結果が示されており，加齢に対する態度の認知機能的側面における影響が検討されている（Levy & Langer, 1994）。また，加齢に対してネガティブな態度を示す人ほど日々のストレッサーに対する反応が増すという，心理的側面における影響も検討されている（Bellingtier & Neupert, 2018）。他にも，心血管機能などの生物学的側面（Levy, Hausdorff, Hencke, & Wei, 2000），身体的活動や自らの健康に対する評価というような身体的側面（Beyer, Wolff, Warner, Schüz, & Wurm, 2015），さらに，ソーシャルネットワークやソーシャルサポートなどの社会的側面（Menkin, Robles, Gruenewald, Tanner, & Seeman, 2016）において，それぞれ，加齢について抱くネガティブなイメージや態度が自分自身の加齢に悪影響を与えるということが確認されている。反対に，各研究結果から，加齢や高齢者に対してポジティブなイメージや態度を持っていると，健康状態や心理状態など，さまざまな側面に良い影響があるということが示されている。

したがって，加齢や高齢期に対してどのようなイ

メージや態度を持つかということが，その対象となる高齢者のみならず，あらゆる世代の人々のエイジングプロセスの質を左右し得る重要なポイントであると言える。このことを踏まえて，加齢や高齢者に対してポジティブな態度を示す人とネガティブな態度を示す人の違いや，それぞれの態度が生まれる要因やプロセスを明らかにすることで，現在多くの人が示しているネガティブな態度をよりポジティブなものに変えられるような介入方法について検討することができ，社会の人々のより健康的で幸福なエイジングの実現に貢献できる。

これまでのエイジズム研究

それでは，これまでの研究で，エイジズムについてどのようなことが分かってきているのだろうか。エイジズムの研究は，先に挙げたセクシズムやレイシズムに比べると圧倒的に数が少ないが，Butler，Palmore 両氏の研究を土台として，これまでにさまざまな研究が蓄積されてきた。日本のエイジズム研究について文献レビューを行った朴（2018）によると，日本での研究は，エイジズムの特徴を分析することを目的としたものが多く，特に看護学や社会福祉学の学問分野を中心に研究がなされている。また，得られた結果についても，日本のエイジズムや高齢者イメージの特徴，あるいは，エイジズムに影響を与えるさまざまな関連要因を明らかにしたというのが主な成果である。エイジズムが生起する心理的なメカニズムについて理論的枠組みを用いて解明しようと試みた研究はあまり見られず，エイジズムがいかに生成されるのかを含むエイジズム全体の理論的考察を行うことが今後の研究課題として一番に挙げられている（朴, 2018）。以下では，心理学の領域での研究を中心に，これまでに明らかになったエイジズムの関連要因と，エイジズムの生起を説明する理論について見ていく。

エイジズムに影響する要因

エイジズムを強化あるいは緩衝する要因について，これまでさまざまな研究がなされてきた。まず，加齢のプロセスや高齢者に関する知識がエイジズムの程度に影響するということが示されている。Dollinger & Lori A. Harris（2001）は，高齢者心理学の講義を受けた群と受けなかった群において高齢者への態度を比較した。その結果，高齢者心理学の講義を受けた群では，高齢者に対する知識と態度においては向上が見られたが，自分自身の加齢に対する態度や不安においては改善が見られないという結果が得られた。次に，高齢者との接触の量や質がエイジズムに与える影響についても検討されてきた。Allan & Johnson（2008）は，先行研究から，高齢者との交流の量的側面ではなく質的側面こそが，高齢者に対する態度に影響すると述べている。また，エイジズムの強力な規定要因のひとつとして加齢不安が検討されており（Bodner, Shrira, Bergman, Cohen-Fridel, & Grossman, 2015），知識や接触が加齢不安を介してエイジズムに影響することを示した研究もある（Allan & Johnson, 2008）。さらに，ステレオタイプに当てはまらないものは無視し，当てはまるものだけを知覚するという選択的知覚によって，高齢者のステレオタイプの永続性が説明されている（Palmore, 1995）。その他にも，メディアによる固定概念に基づいた報道や，年金問題に見られるような社会資源をめぐった世代間の競争など，さまざまな要因が影響することによってエイジズムが維持・強化されると考えられている。そして，さらに注目すべきなのが，エイジズムに，セクシズムやレイシズムなどの他の偏見や差別が結合することで，その偏見や差別が一段と強化される場合があるということである。特に，対象が男性であるか女性であるかによってエイジズムの程度が異なるというような，「二重基準（double standard）」に着目した研究が比較的多くなされている（Boudjemadi & Gana, 2012; Chonody & Teater, 2016）。具体的には，主に身体的魅力の視点から，男性よりも女性に対するエイジズムの方が強くなるという説明が一般的になされている。一方で，二重基準は男性に対しても存在するということが示唆されている。例えば，メタ分析を用いて若者と高齢者に対する態度を検討した研究では，その対象が高齢男性である場合，能力面の評価がより否定的になるということが示されている（Kite, Stockdale, Whitley, & Johnson,

2005）。このように，エイジズムを向けられる側の性別が，エイジズムの程度に影響するということも分かっている。以上のように，エイジズムは実に多様な要因による影響を受け，社会に蔓延している。

エイジズムを説明する理論的枠組み

それでは，エイジズムの生起について，これまでにどのような理論を用いた説明がされてきたのだろうか。先行研究では，さまざまな理論的枠組みを用いて説明がなされている。

North & Fiske（2012）は，エイジズムを説明するさまざまな社会心理学的理論についてレビューを行った。例えば，社会・文化的理論では，ステレオタイプ内容モデルや社会的役割理論などによって説明されている。また，進化論による説明では，包括適応度などを用いた説明がなされている。さらに，個人あるいは対人レベルでの心理学的理論に基づいた説明もいくつか存在する。例えば，魅力的な人は非魅力的な人に比べてポジティブに評価されるという報告（Langlois et al., 2000）があることから，しわやたるみのような身体的魅力の低下によって高齢者は非魅力的とみなされ，高齢者の全体的な評価が悪くなるというネガティブハロー効果の観点からの説明がなされている。ここからは，心理学の分野で特に注目される 2 つの理論に基づいたエイジズムの説明について，少し詳しく紹介する。

まず，人は死の脅威を思い出させる対象として高齢者を遠ざけようとするという，存在脅威管理理論（Terror Management Theory，以下 TMT）に基づく説明がなされている。TMT によると，人々は，意味や永続性を与えてくれる文化的世界観への信仰を維持し，その世界観で規定された基準に従って生活することで価値を得ることによって，死の強力な脅威から自身を防御している。例えば，善良なクリスチャンや偉大な戦士になることなどによって，命に限りがある単なる生き物という存在から自らを心理的に高めることができる（Martens, Goldenberg, & Greenberg, 2005）とされる。しかし，人間の肉体的な性質を思い出させるようなものは，この防御の有効性を脅かすものと判断される。したがって，加齢の身体的特徴が顕著になる高齢者を遠ざけたりネガティブな態度を示したりする結果が生じるという説明が可能である。実際に，高齢者が死のリマインダーとして作用すること，死の不安が高齢者に対するネガティブな態度に寄与することがそれぞれ実験によって示されている（Martens, Greenberg, Schimel, & Landau, 2004）。

次に，社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory，以下 SIT）の観点から，高齢者と自らを区別することで自尊心が保たれるという説明もなされている。SIT に基づくと，社会集団の一員であることは人々にとって重要なことであり，自己感覚の一部となる。そのため，自分が属する内集団をポジティブな視点で定義しようとし，反対に外集団をネガティブな視点から定義する。これによって，内集団のメンバーがポジティブな属性と関連付けられるため，より優れた自己アイデンティティを獲得することになる。これを加齢の文脈に適用した場合，人々は，内集団である若者集団と，外集団とされる高齢者集団に分割される。若者集団は高齢者集団に対するネガティブなステレオタイプや態度をもち，これによって自分の集団をより好意的に捉える（Chonody & Teater, 2016）と説明されている。また，この説明は高齢者間のエイジズムについても適応することができるとされており，自尊心を保つために，一部の高齢者は，自らを若者集団に帰属し，他の高齢者や自分よりも高齢な人に対してエイジズム的な態度を示す場合があると説明されている（Bodner, 2009）。

今後のエイジズム研究についての提言

エイジズムの生起要因や，エイジズムに影響を与える要因についてさまざまな研究がなされてきたが，個々の要因がエイジズムに影響を与えるのかどうかについての検討に留まらず，それぞれの要因がどのように関連し，影響しあってエイジズムを生起させているのかについて検討した研究は，あまり蓄積されていない。今後は，これまでの研究で解明されてきた，エイジズムに影響を与える諸要因を概観し，それらの要因がどのように関連してどのようなプロセ

スでエイジズムを生起させるのかという点について，理論的考察を行っていく必要がある。さらには，それらの要因によってどの程度エイジズムの生起を説明することが可能なのかという視点も合わせて検討し，さらに研究を発展させていくことが必要である。

ここで，もう一つ重要なのは，年齢の影響を考慮するという点である。エイジズム研究の多くは若者を対象として行われているが，高齢者間のエイジズムや自分自身に対するエイジズムも存在することを踏まえると，幅広い年齢層を対象にして，年齢がエイジズムに与える影響を検討する必要がある。ただし，その際には，年齢とエイジズム得点の関連というような単純な関係性だけでなく，年齢と他の要因の関連や，年齢層で分けたときに他の要因がエイジズムに与える影響にも着目すべきであると考えられる。その理由は，年齢という要因が他の要因に影響し，結果としてエイジズムに影響しているという可能性や，同じ要因でも年代間で異なる効果が見られる可能性が考えられるからである。例えば，前節のTMT に関する説明では死の不安をエイジズムの生起要因として挙げたが，死の不安自体の年齢差が示唆されていることに加え（松田, 2000），Bodner et al.（2015）では，死の不安を解消する役割をエイジズムが果たしているのか年齢別に検討することの必要性が指摘されており，死の不安とエイジズムの関係が年齢によって異なる可能性も示唆されている。他の要因に関しても，このような年代間の差がある可能性を十分に考慮した上で，各要因の影響を検討することが必要であると考えられる。そして，もし年齢による差があるのなら，どうしてその差が生じるのかという点についても考察しながら研究を進めてくことが重要である。しかし，現状としては，エイジズムが生起する要因やプロセスに関して，年齢によって異なるパターンを検討した研究は少ない。具体的な研究成果については次節で紹介するが，既存の研究でも一貫した結果は得られていない。エイジズムが生起するプロセスを検討する際には，エイジズムに影響する要因や要因間の関係性，あるいは，影響の仕方が，年齢によって異なるのではないかという点にも着目して研究することで，エイジズムをより詳細に理解することができると言える。さらにその結果として，年代に応じた個別の介入方法を検討することができると考えられる。

仮説の立案

エイジズムが生起するプロセスについて検討していくにあたり，先行研究の知見から得られた 1 つの研究の方向性について述べる。TMT と SIT の枠組みを用いたエイジズムの説明についてレビューを行った Bodner（2009）は，若者が示すエイジズムを説明するには TMT の枠組みがより適切であり，一方，高齢者が示すエイジズムを説明するには SIT の枠組みがより適切であると結論付けた。その理由として，まず，若者の場合は，エイジズムが死の不安に対する防御的メカニズムとして機能するが，高齢者は，より多くの死に関連する経験をしており，死を受け入れているため，死の不安そのものが低く，エイジズムによる防御も必要ないからであると説明されている。一方で，高齢者は，若い人を内集団，より高齢の人を外集団と見なし，他の高齢者と自分自身を区別することで自尊心を高めるという SIT に基づいた説明はよく当てはまり，高齢者のエイジズムを説明するものとして適しているとされた。しかし，TMT の枠組みを用いてエイジズムを検討したこれまでの研究のほとんどが若者を対象としたものであり，また，高齢者を対象として存在脅威管理について検討したいくつかの研究の中には，死の不安がエイジズムに影響することを示した研究（Bodner et al., 2015）もあれば，死の不安に対する防御としてエイジズムが機能するという説明が高齢者には当てはまらないということを示した研究（Maxfield et al., 2007）もあり，一貫した結果が得られていない。したがって，高齢者のエイジズムが TMT の枠組みによってどれほど説明できるのかは明確ではない。また，若者のエイジズムを SIT の枠組みで説明した研究も見られ（Chonody & Teater, 2016），TMT の枠組みにおける説明が適切であると結論付けるのは議論の余地があると考えられる。Bodner（2009）も，両方の年代で両方の理論を用いた検討を行うことの必要性を指摘している。そこで，この研究の視点を参考に，これまでの研究成果について，若者が示すエイジズ

ムなのか高齢者が示すエイジズムなのか，TMT による説明なのか SIT による説明なのかという 2 つの軸から整理を行った。

その前段階として，まず，若者にとって，加齢や死は未知なものであり，現段階では実感できないものあるという点に着目した。「不確実性への不耐性（Intolerance of uncertainty）」という観点から，不確実なものに対して人々は容認できないという気持ちや不安を抱く傾向があると説明されている（Dugas, Gosselin, & Ladouceur, 2001）。したがって，若者にとって，年をとることや死は不確実なものであるため，それらに対して不安を感じると仮定し，その不確実性の度合いは加齢に伴って変化すると仮定した。つまり，若年期から高齢期へとライフコースが進行することに伴って，自分自身や親の加齢，さらには死別というものを経験することになり，加齢や死についての不確実性が減少し，そこから生じる不安の度合いも変化すると考えた。

ここで，TMT と SIT の各理論的枠組みにおいて，エイジズムと不安の関連がどのように扱われてきたのか確認しておく。まず，TMT による説明では，「死の不安（Death anxiety）」に対する防御メカニズムとしてエイジズムが機能するとされている（Bodner, 2009）。一方，SIT による説明では，先に述べたように，内集団としての若者集団と外集団としての高齢者集団が想定されているが，エイジズムに特徴的な点として，若者も最終的には高齢者になる，すなわち，内集団から外集団へと移動するという点が挙げられる。したがって，人々が加齢を恐れ，高齢になることや高齢に見られることに不安を抱くのは，単純に内集団から外集団へ移行することを恐れるからであると説明されている（Chonody & Teater, 2016）。以上より，TMT の枠組みでエイジズムを説明する際には「死の不安」が，SIT の枠組みでエイジズムを説明する際には「加齢不安（Aging anxiety）」が，それぞれの背景に想定されていると考えることができる。ここまでのことを念頭に置き，これらの不安に着目して先行研究の整理を行った。

まず，若者の示すエイジズムに関する研究では，高齢者が死のリマインダーとして作用することと，死の不安が高齢者に対するネガティブな態度に寄与することが，それぞれ若者を対象とした実験によって示されている（Martens et al., 2004）。また，若者の加齢不安が高齢者に対するネガティブな態度を生じさせるということが示されている（Allan & Johnson, 2008）。したがって，若者の場合，死の不安と加齢不安の両方が影響してエイジズムが生起していると考えられる。すなわち，若者のエイジズムは，TMT と SIT の両枠組みによって説明されると予想される。

次に，高齢者の示すエイジズムに関する研究では，Maxfield et al.（2007）は，死のリマインダーに対する防御的傾向の年齢差を検討し，エイジズムによって死の不安から自らを防御するというメカニズムが高齢者には適応されないことを示した。一方で，中高年層を対象とした研究では，死の不安と加齢不安がともにエイジズムに影響し得ることが示されたが，両方の不安の効果が合わさった場合は，優勢な方のみがエイジズムに影響するという結果が得られた（Bodner et al., 2015）。死の不安に関しては，死に関連する経験が多いことや，死ぬ運命を受容しているということから，高齢者で減少すると考えられているが（Bodner, 2009），加齢不安に関しては，その側面によって加齢の影響が異なるとされている。具体的には，高齢者に関する講義を受けた群では，高齢者に対する知識と態度の向上が見られたが，自分自身の加齢に対する態度や不安の改善は見られなかった（Dollinger & Lori A. Harris, 2001）。また，実際に各年代の加齢不安を測定した研究では，自分自身の加齢というよりは他者である高齢者に対する感情に関わる側面においてのみ，加齢に伴う減少が見られた（Benton, Christopher, & Walter, 2007）。これらとは一致しない結果を示す研究もあるが（Lasher & Faulkender, 1993），まとめると，知識や経験が増えることによって，一般的な高齢者に対するネガティブな感情や態度は減少するが，自分自身の加齢に対する不安は解消されにくいということが示唆されている。したがって，高齢者が示すエイジズムの場合，加齢に伴って経験や知識が増えることで，死の不安の影響にはばらつきが生じるものの，加齢不安は比較的安定して影響すると考えられる。すなわち，高

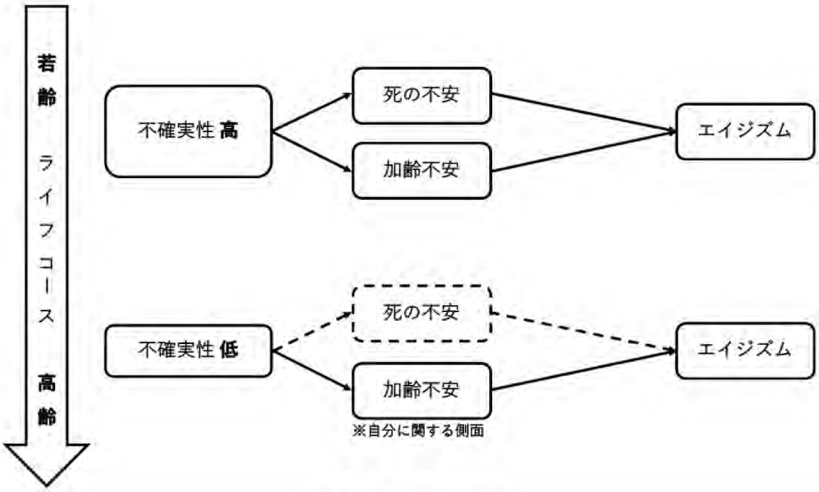

図 1. 仮説のモデル図

齢者のエイジズムは，主に SIT の枠組みによって説明されると予想される。

以上のことから，若者の示すエイジズムは TMT と SIT の両枠組みによって，一方，高齢者の示すエイジズムは SIT の枠組みによってよりよく説明されるという仮説が立てられた。仮説のモデル図を図 1 に示す。ただし，この仮説について実際に検討する際には，対象となる「若者」や「高齢者」の年齢等を明確にしたうえで，先に述べたエイジズムの概念的枠組みと照らし合わせて，どの形態のエイジズムについて検討するのかを明確にすることが必要である。

おわりに

本論文で提案された 1 つの仮説は，先行研究でなされてきたエイジズムの実態の調査や関連要因の検討という枠を超え，エイジズムの生起要因について直接的にアプローチするという点において，さらに，不確実性という視点から年齢差の説明を試みるという点において，十分に検討する意義があると言える。この仮説について検証することで，TMT と SIT の各理論によってどの程度エイジズムが説明できるのか明らかにすることができ，さらに，年齢による差を説明する新たな知見が得られることが期待される。

引用文献

Allan, L. J., & Johnson, J. A. (2008). Undergraduate Attitudes Toward the Elderly: The Role of Knowledge, Contact and Aging Anxiety. *Educational Gerontology*, *35*(1), 1–14. https://doi.org/10.1080/03601270802299780

Bellingtier, J. A., & Neupert, S. D. (2018). Negative aging attitudes predict greater reactivity to daily stressors in older adults. *Journals of Gerontology - Series B Psychological Sciences and Social Sciences*, *73*(7), 1155–1159. https://doi.org/10.1093/geronb/gbw086

Benton, J. P., Christopher, A. N., & Walter, M. I. (2007). Death anxiety as a function of aging anxiety. *Death Studies*, *31*(4), 337–350. https://doi.org/10.1080/07481180601187100

Beyer, A. K., Wolff, J. K., Warner, L. M., Schüz, B., & Wurm, S. (2015). The role of physical activity in the relationship between self-perceptions of ageing and self-rated health in older adults. *Psychology and Health*, *30*(6), 671–685. https://doi.org/10.1080/08870446.2015.1014370

Bodner, E. (2009). On the origins of ageism among older and younger adults. *International Psychogeriatrics*, *21*(6), 1003–1014. https://doi.org/10.1017/S104161020999055X

Bodner, E., Shrira, A., Bergman, Y. S., Cohen-Fridel, S., & Grossman, E. S. (2015). The interaction between aging and death anxieties predicts ageism. *Personality and Individual Differences*, *86*, 15–19. https://doi.org/10.1016/J.PAID.2015.05.022

Boudjemadi, V., & Gana, K. (2012). Effect of mortality salience on implicit ageism: Implication of age stereotypes and sex. *Revue Européenne de Psychologie Appliquée/European Review of Applied Psychology*, *62*(1), 9–17. https://doi.org/10.1016/j.erap.2011.11.002

Chonody, J. M., & Teater, B. (2016). Why do I dread looking old?: A test of social identity theory, terror management theory, and the double standard of aging. *Journal of Women and Aging*, *28*(2), 112–126. https://doi.org/10.1080/08952841.2014.950533

Dollinger, Lori A. Harris, S. (2001). Participation in a course on aging: knowledge, attitudes, and anxiety about aging in oneself and others. *Educational Gerontology*, *27*(8), 657–667. https://doi.org/10.1080/036012701317117893

Dugas, M. J., Gosselin, P., & Ladouceur, R. (2001). Intolerance of Uncertainty and Worry: Investigating Specificity in a Nonclinical Sample. *Cognitive Therapy and Research*, *25*(5), 551–558.

Iversen, T. N., Larsen, L., & Solem, P. E. (2009). A conceptual analysis of Ageism. *Nordic Psychology*, *61*(3), 4–22. https://doi.org/10.1027/1901-2276.61.3.4

Kite, M. E., Stockdale, G. D., Whitley, B. E., & Johnson, B. T. (2005). Attitudes toward younger and older adults: An updated meta-analytic review. *Journal of Social Issues*, *61*(2), 241–266. https://doi.org/10.1111/j.1540-4560.2005.00404.x

Langlois, J. H., Kalakanis, L., Rubenstein, A. J., Larson, A., Hallam, M., & Smoot, M. (2000). Maxims or myths of beauty? A meta-analytic and theoretical review. *Psychological Bulletin*, *126*(3), 390–423. https://doi.org/10.1037/0033-2909.126.3.390

Lasher, K. P., & Faulkender, P. J. (1993). Measurement of Aging Anxiety: Development of the Anxiety about Aging Scale. *The International Journal of Aging and Human Development*, *37*(4), 247–259. https://doi.org/10.2190/1U69-9AU2-V6LH-9Y1L

Levy, B. (2009). Stereotype Embodiment. *Current Directions in Psychological Science*, *18*(6), 332–336. https://doi.org/10.1111/j.1467-8721.2009.01662.x

Levy, B., & Langer, E. (1994). Aging Free From Negative Stereotypes: Successful Memory in China and Among the American Deaf. *Journal of Personality and Social Psychology*, *66*(6), 989–997. https://doi.org/10.1037/0022-3514.66.6.989

Levy, B. R., Hausdorff, J. M., Hencke, R., & Wei, J. Y. (2000). Reducing Cardiovascular Stress With Positive Self-Stereotypes of Aging. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, *55*(4), P205–P213. https://doi.org/10.1093/geronb/55.4.P205

Martens, A., Goldenberg, J. L., & Greenberg, J. (2005). A Terror Management Perspective on Ageism. *Journal of Social Issues*, *61*(2), 223–239. https://doi.org/10.1111/j.1540-4560.2005.00403.x

Martens, A., Greenberg, J., Schimel, J., & Landau, M. J. (2004). Ageism and Death: Effects of Mortality Salience and Perceived Similarity to Elders on Reactions to Elderly People. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *30*(12), 1524–1536. https://doi.org/10.1177/0146167204271185

松田 信樹 (2000). 死の不安の年齢差に関する研究 大阪大学教育学年報, *5*(3), 71–83. Retrieved from https://doi.org/10.18910/8785

Maxfield, M., Pyszczynski, T., Kluck, B., Cox, C. R., Greenberg, J., Solomon, S., & Weise, D. (2007). Age-related differences in responses to thoughts of one's own death: mortality salience and judgments of moral transgressions. *Psychology and Aging*, *22*(2), 341–353. https://doi.org/10.1037/0882-7974.22.2.341

Menkin, J. A., Robles, T. F., Gruenewald, T. L., Tanner,

E. K., & Seeman, T. E. (2016). Positive Expectations Regarding Aging Linked to More New Friends in Later Life. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, *72*(5), gbv118. https://doi.org/10.1093/geronb/gbv118

Monsees, C. V. (2002). AGEISM. In: Ekerdt, D. J. (Ed.) *Encyclopedia of AGING* . Vol. 1. (pp. 36-40). Farmington Hills, MI: Thomson Gale.

内閣府 (2019). 令和元年版高齢社会白書 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html (2019年7月19日)

Ng, R., Allore, H. G., Trentalange, M., Monin, J. K., & Levy, B. R. (2015). Increasing Negativity of Age Stereotypes across 200 Years: Evidence from a Database of 400 Million Words. *PLOS ONE*, *10*(2), e0117086. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0117086

North, M. S., & Fiske, S. T. (2012). An inconvenienced youth? Ageism and its potential intergenerational roots. *Psychological Bulletin*, *138*(5), 982–997. https://doi.org/10.1037/a0027843

Palmore, E. B. (1990). *AGEISM : Negative and Positive*. New York, NY: Springer Publishing Company. (パルモア, E. B. 奥山正司・秋葉聰・片多順・松村直道 (訳) (1995). エイジズム 法政大学出版局)

朴 蕙彬 (2018). 日本のエイジズム研究における研究課題の検討 ――エイジズムの構造に着目して―― 評論・社会科学, *3*(124), 139–156. https://doi.org/10.1590/s1809-98232013000400007

São José, J. M. S. de, & Amado, C. A. F. (2017). On studying ageism in long-term care: a systematic review of the literature. *International Psychogeriatrics*, *29*(3), 373–387. https://doi.org/10.1017/S1041610216001915